

書評

アンドレス・レセンデズ著 『太平洋の征服：無名の船乗りと大航海時代最後の大航海』

ジェイソン・モーガン（麗澤大学准教授）
翻訳：福島朋子

過去一世紀半以上にわたり、日本にとって最も重要な外交相手は、アメリカ合衆国であった。しかし、米国が存在する何世紀も前から、日本は、もう一つの北米帝国と、その西太平洋への進出の野心と格闘していた。スペインである。多くの歴史家たちは、南北アメリカ大陸は植民地にされたという歴史的事実や、新世界と旧世界の関係性という観点から、南北アメリカ大陸の物語を組み立ててきた。だが、実際には、スペイン帝国は15世紀から力と野望とともに大海原に乗り出し、まずは北米を手にしながらも、当初の目的であったアジアに照準を合わせ続けていたのである。スペインは、偶然にも現在のメキシコや中南米にあたるヌエバ・エスパーニャ(新スペイン)を発見し、その後そこで行き当たりばったりの支配を続けたが、その間にもスペインの征服者たちの目は、常に西太平洋に向けられていた。ヌエバ・エスパーニャに植民してもなお、彼らはフィリピンをはじめアジアで、日本人とは交易と同時に小競り合いを何十年にも渡って続けていたのも納得できる。すべてが終わりを迎えたのは、1588年であった。それは、フィリピンの名前の由来にもなったフィリップ2世(1527-1598)が、自国を凌駕し、やがてスペイン帝国を永遠に終わらせ、アメリカ帝国を生み出すことになる、当時の新興国、のちの大英帝国に対して、スペインの誇る無敵艦隊を出撃させ、敗れた時である。そして、スペインが最後に残されたアジアへの足がかりを失ったのは、それから約300年後の1898年である。アジアの宗主国の一つとなっていた大英帝国から、北米の帝国領を受け継いだアメリカ合衆国が、弱体化したスペインに勝利した結果、スペインからフィリピンの領土を奪い取った。これをきっかけにして、ワシントンと日本は、こののち半世紀も経ないうちに破滅的な結末を迎えることになる激突への道を突き進むこととなった。¹スペインが南北アメリカ大陸を発見し、メキシコをはじめとするヌエバ・エスパーニャを得たのち何世紀もの間、アジアを支配することをあきらめなかったのは明確である。この目標からついに目をそらさざるを得なかったのは、かなり時が経ってからであった。つまり、日本はそのほぼ初期の段階で、スペイン帝国のドラマの一部と化していたのである。

しかし、大航海時代のアジアは、はじめはポルトガルが支配していた。日本に向こう見ずともいえる宣教師たちを派遣した、スペインの宿敵である。ゆえに、スペインの航海士たちは、アジアに足がかりを築くには、ポルトガル人たちが経験したことの無い難題を克服しなければならなかった。ポルトガルは東廻り航路で、アフリカ、喜望峰を回り、インド洋を横断してアジアに到達した。しかし、大航海時代の後発組であるスペインは、西廻り航路をとり、まずは大西洋を横断しなければならなかった。大西洋の風と海流の過酷さを考えれば、これは並大抵のことではない。また、無事に大西洋を渡ったとしても、

その後は、南アメリカ大陸の南端に位置するマゼラン海峡をまわって太平洋に出ねばならない。これは、ポルトガル人だがスペインに雇われた探検家フェルディナンド・マゼラン(1480-1521)にちなんで名づけられた海峡で、スペインの船乗りたちは、この冷たく荒れ狂うマゼラン海峡に浮かぶ島々を避けながら進むしか、西廻り航路でアジアに到達することはできなかった。メキシコがスペインの領土となり開拓された後には、巨大な太平洋を横断するために北米で製造された船で、アカプルコをはじめとする太平洋に面した港から、新たに出発する方法が取れるようになったが、いずれにしても、東回り航路とは比較にならない困難な航路であった。しかし、マゼランとその乗組員たちは、太平洋横断が可能であることを証明していた。それまで不可能だとされていたのは、アジアから北米へ向かって太平洋を横断する往路であった。メキシコ系アメリカ人の歴史家アンドレス・レセンデズは、最新作 *Conquering the Pacific* (『太平洋の征服』) の中で、それがどのように成し遂げられたのか、そしてその過程で、アジア、アメリカ、太平洋諸島が、急成長するヨーロッパ支配の庇護の下でどのように関わりあっていったのかを語っている。

このように、壮大でありながらも、埋もれていた歴史を復元することが、レセンデズの特徴であることは以前にも証明されている。彼の前著、*The Other Slavery* (『もうひとつの奴隷制度』) は、その禍々しいルーツが、アフリカの人々を拉致したことと結びつけて語られることの多い、アメリカの慣例について書いたものである。²レセンデズは、古文書に残された記録をもとに、アメリカ合衆国よりもラテンアメリカに視点を置き、ヨーロッパ人がアフリカの人々の売買を新世界に持ち込む以前から、ネイティブ・アメリカンたちは、既に互いを奴隷にする慣習を持っており、ヨーロッパ人入植者たちも奴隷にしていたことを明らかにした。*Conquering the Pacific* は、これと同様に、失われた世界に息を吹き込み、蘇えらせたものである。レセンデズはこの本の中で、しばしば偉大な知性と大胆さを備えたヨーロッパの男たちが、当時は自殺行為であり、狂気の沙汰とさえ思われた、未知の土地を目指して底なしの大海原を航海する物語を詳細に描いている。

しかし、その話は隠されてきたものであるのと同様に、重大な意味を持つものでもある。この偉業を成し遂げようとする過程で、未熟だったスペイン帝国は、新大陸や日本を含むアジアに文化的・政治的に浸透していった。例えば、スペイン人フアン・パブロ・デ・カリオン(1512-1582年頃)は、「フィリピンで活動していた倭寇と侍の一団を攻撃し、ヨーロッパの剣vs日本の刀の珍しい対決を指揮した」(48)。*Conquering the Pacific* には、スペインから見れば地球の裏側にいたスペイン帝国主義者たちを垣間見れるような、新しい視点からの記述が多くある。レセンデズの仕事は、この新著ならびに過去の著書においても、歴史的見解は決してお仕着せのものであってはならないこと、私たちは忘却する生き物であり、定められたイメージだけで歴史を判断しないためには、常に過去を学び直しさなければならないことを思い出させてくれる。確かに、レセンデズのこの本には、日本はほとんど登場しない。しかし、*Conquering the Pacific* には、「黒潮」が頻繁に登場してくる。これは、当時の船乗りたちと、日本列島の南岸を流れる黒潮と、そして太平洋における日本の存在との大きな接点を物語っている。太平洋を語る時に、日本の存在は無視できないのである。このように、レセンデズは、地球上で最大の海である太平洋は、アメリカ合衆国が呼ぶような「アメリカの湖」などではないことや、アジアとアメリカ大陸との交流の記録は、アメリカ合衆国目線で理解できることよりも、遙か昔に遡ること

を、思い出させてくれる。

レセンデズは、私たち自身が生きているこの世界を創造する上で重要な意味を持っているにもかかわらず、ほとんど忘れ去られてしまった時代と場所を、12の章にわたって美しい文章と詳細な記述によって、注意深く再現している。アメリカの子供たちは、前述のマゼランが1519年から1522年にかけて地球を「一周」したと習うが、レセンデズは、マゼランの計画は世界一周ではなく、アジアまで行って、「来たのと同じ道」、つまり太平洋を横断して戻ってくることであったと教えてくれる(40)。マゼランがこれを果たせなかったこと、そしてフィリピンの名付け親であるルイ・ロペス・デ・ビジャロボス(1500-1546)のちに率いた不運な遠征が、マゼランと同じように失敗に終わったことは、スペインの太平洋への野望の終わりを告げるものであったかもしれない。それは16世紀に入ってもなお、メキシコやペルーなど新大陸におけるスペイン支配の計画よりも、忘れられない大きな欲望であったのだが。アジア貿易を有利に統制しようとするスペインの宿敵は、ポルトガルだった。スペインがポルトガルと支配領域境界線を決定したトルデシリャス条約(1494年)によって、ポルトガルは現在のブラジルの大西洋に突き出た東の円錐部分を通る線から東の、スペインは西の、半分ずつを領有することになったからだ。経度の緻密な計測が困難だった時代に引かれた東西を分割する線が、正確にはどこからどこなのかは、長年の論争の種であったが、レセンデズはこの本の中でこれをうまく説明している。マゼランらは、条約線によって、アジアはスペインが保有すべき領土の側の一部にあると考えた。こうして新大陸のほぼすべてから西太平洋にまで深く浸透したスペインは、アジアにおいてもポルトガルのライバルとなったのである。21世紀の私たちは、スペインをアメリカ帝国として見る事が多く、実際そうであったが、スペインの目的は常にアジアであり、それこそがイベリア半島の隣人であり、不倶戴天の敵であったポルトガルとのライバル関係の核心であった。

しかし、スペイン帝国の願望は阻まれた。太平洋は、スペインの計画にとって、困難な未知の変数であり続けたのだ。レセンデズは、「太平洋を征服」し、その秘密を解き明かし、東から西、西から東の、両方向に太平洋を横断する方法を学ぼうと駆り立てられる、歴史の主人公たちを紹介している。そのうちの一人はアンドレス・デ・ウルダネータ(1508-1568)という、ほとんど「無名の船員」であった。彼は、冒険家から聖アウグスティヌス修道会の修道士、そして再び冒険家となった人物で、のちに初代フィリピン総督となるミゲル・ロペス・デ・レガスピ(1502-1572)の指揮の下、スペイン王室のためにフィリピン諸島をスペインの支配下に置くという極秘任務に就いた。太平洋を往復できるようにし、新大陸とアジアを結ぶ有効な航路を確立しようとしたことが、16世紀のスペインが諦めずに続けた努力の基本理念であったように、レセンデズの物語の核心でもある。当時の多くのヨーロッパ人は、アジアと北アメリカは北の端でつながっていると信じていた。レガスピとウルダネータとともに、太平洋横断航海を試みたアフリカ系ポルトガル人の冒険家ロペ・マルティンは、日本の北の果てに出くわすかもしれないと信じて太平洋の極北海域まで航海したこともある(154; 148も参照)。そのような中、不完全な地図と、天文学と地球の磁場の研究に基づいた新しい航海術を試しながら、スペイン人は1565年、「ブエルタ」(スペイン語で「往還」)を達成した。世界で初めて太平洋を往復横断したという記録である。こうして、広大な太平洋は征服されたのである。

このように、太平洋を、少なくともその横断については、人類の理解の範疇に収めたことは、歴史上の画期的な出来事だった。では、なぜ、人類史上におけるこの記念碑的な出来事が、忘れられてしまったのだろうか？ マゼランが誰であったかは誰もが知っている。だが、アンドレス・デ・ウルダネータや、もっと言えばロペ・マルティンの名前を聞いたことがある人は何人いるだろうか？ ここに *Conquering the Pacific* の言外の意図がある。それは、アンドレス・レセンデズの著作を純粹に歴史的なものであるだけでなく、さまざまなレベルで説得力のあるものになっている社会認識についてである。マルティンが映し出すように、あるいはマルティンの存在が示すような、歴史資料にあっても解明することが困難な記録は、私たちが思っている以上に、私たちの歴史認識には、排除すべき思い込みや雑念が存在しているということを想起させてくれる。ヨーロッパ人とアフリカ人の混血であったロペ・マルティンは、当時の他の冒険家たちと同じように、生き残るために不利な状況に立ち向かったが、今日でもなお残る、過去を語ることに制約をかける社会的慣習を克服することはできなかった。ヨーロッパとヌエバ・エスパーニャ、そしてフィリピンや他のヨーロッパ諸国の植民地における社会には、明らかな階層の違いが存在し、ヨーロッパ人男性が言論を支配し、教育を管理し、歴史を書いていた。太平洋の征服は、さまざまな背景を持つ多くの人々が携わった大事業であったが、地球の大部分を統治するようになったヨーロッパ中心の世界観の中では、ロペ・マルティンをはじめとするあまたの人々は、歴史からほとんど排除されてしまった。そして、マゼランのようなヨーロッパの白人だけが、人々の記憶の中にとどまっている。³ 太平洋は征服されたが、私たちの心にはまだ越えなければならない別のフロンティアがあるのだ。

この意味でも、また長い間失われていた歴史を素晴らしい文章で語っている点でも、レセンデズの本には大きな価値があり、彼の仕事は称賛に値する。アンドレス・レセンデズの *Conquering the Pacific* のおかげで、私たちはこれまで知らなかった歴史を知ることができるのである。さらに重要なことは、私たちが知らなかったこと、そしてなぜ知らなかったのか、ということである。おそらく、日本にいる私たちにとっても、教訓があるはずだ。歴史認識における難攻不落の砦のような思い込みは、底なしの深海にも存在する波に洗われた塩の砂漠よりも征服するのは難しいかもしれない。アメリカとの関わりは、日本の歴史の中で圧倒的に大きな部分を占めてきた。しかし、それは日本がヨーロッパや北米の人々と交流した唯一の物語というには程遠い。北米において、ヨーロッパの語るヨーロッパ視点の物語が影を潜めるにつれ、これまで埋もれてきた、多様な人間の、さまざまな営みに満ちた、豊かな歴史が姿を現しはじめている。失われた世界を発見したい人だけでなく、現在の歴史認識パラダイム以前の裾野の広い歴史の視点を取り戻したい人にも、私はアンドレス・レセンデズの *Conquering the Pacific* を、自信を持ってお勧めしたいと思う。⁴

原著：

Andrés Reséndez, *Conquering the Pacific: An Unknown Mariner and the Final Great Voyage of the Age of Discovery* (Boston, MA & New York, NY: Houghton Mifflin Harcourt, 2021). Hardcover. ISBN 9781328515971.

注

- 1 See, e.g., 渡辺惣樹、『日米衝突の萌芽：1898-1918』（草思社、2013年）
- 2 Jason Morgan, “Review of Andrés Reséndez, *The Other Slavery: The Uncovered Story of Indian Enslavement in America*,” *Studies in Moralogy*, vol. 84 (2020), 1-5 <https://www.moralogy.jp/wp-content/uploads/2021/11/No.84-Morgan.pdf>
- 3 See Andrés Reséndez, “How History Erased the Black Mariner Who ‘Opened’ the Pacific,” *Time*, October 18, 2021
- 4 原稿を見事に日本語に訳して下さった福島朋子さんに、お礼と感謝の気持ちを表したい。JM note.